

2008 年 11 月 6 日
ベトナム研修プログラムレポート
国際学部国際学科3年
村松千歳

ベトナム・ダナン市の都市計画

—グローバル化の中での、ある都市の試み—

はじめに

わたしは今夏、桜美林大学ベトナム総合研修プログラムに参加し、そこで貴重な経験を数多くさせていただいた。発展途上にある同国で 10 日ほど生活をし、その間に現地の大学生から日系企業のトップ、都市計画を担う省庁の方などとお話できたことは、自分にとって得難い財産になっている。

出発前に文献やガイドブックにより得たベトナムに関する知識・イメージと、実際に訪れて見た様子ではいくつかの相違点があった。そんな中で、わたしは自分で見たもの、感じたことをできるだけ詳細に記し、成果として残したいと思う。

今回の研修中、特に濃い内容でわたしの印象に残ったのは、経済発展の現場で見聞きしたことであった。

そこでこれより、対外開放政策が成された現代のベトナムにおける、中部の工業都市・ダナンの試みを中心に報告することで、今研修のレポートとしたい。

このレポートでは、全体を 3 つの構成に分ける。まず第 1 部で、ベトナムのおかれている状況について記述する。その内容はベトナムの歴史と現在の様子についての二つに分け、特に現状については、わたしが実際に体験したことが中心となる。そして第 2 部では、ベトナムに市場主義経済を投入したドイモイという政策について説明する。最後の第 3 部では、本題であるダナン市の都市計画について、ダナン経済開発局で見聞きしたことをベースに取り上げる。

I. ベトナムの置かれている状況

1. ベトナムとはどのような国か

ベトナムは、中国の南、ラオス・カンボジアの東に位置する国である。面積は約32万平方キロメートル¹と日本より少し小さいくらいだが、南北に長い形は似ている。首都はハノイという北部の都市で、公用語はベトナム語であり、国民の8割は仏教徒である²。

日本では戦争のイメージが先行するかもしれないが、戦後30年以上が経ち、その面影はだいぶ薄れているという印

象を受ける。またベトナムの料理や雑貨は若い日本人女性の間で人気があり、美しい陶器や織物を想像する人もいるかもしれない。

経済的な指標としては、一人あたりの国内総生産 (Gross Domestic product、以下 GDP) は 818 \$ (2007 年)³で日本の約40分の1⁴である。通貨はドン (Dong) で、為替レートは1ドル = 約 16,000 ドン⁵となっており、日本人の感覚からするとかなり大きい単位の通貨である。

現在は 500 を超える日系企業がベトナムに進出しており、2005 年 10 月時点で 4000 人以上の邦人が滞在している。

現在も社会主義の国であるが、短期的な滞在でそのことを感じる機会はほとんどない。



(出典: 外務省ホームページ)

2. ベトナム近代の歩み

ベトナムの現状を報告するにおいて、30 年ほど前に終結した戦争とその後の歩みについて、些少ではあるが説明する必要があると思う。この国は、民族の独立とイデオロギー的な対立のために長い戦争状態に置かれていた。特に後者は冷戦構造の中での熱戦としての意味と、同じ民族同士が争った内戦としての二重の意味があり、その激しさを記憶に留めている人も多いと思う。

しばらく南北が分断された状態であったベトナムだが、1975 年 4 月のサイ

¹ 外務省 < <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/data.html> > (参照日: 2008.12.29)

² JETRO < http://www.jetro.go.jp/world/asia/vn/basic_01/ > (参照日: 同上)

³ 同上

⁴ 日本の一人当たり GDP は約 34,000 \$ (2007 年)

⁵ 2008 年 10 月時点。出典は注 1 に同じ

ゴン陥落によりアメリカ軍が撤退し、統一された国家が形成されることとなった。しかしその後の道のりも決して平坦ではなく、1978 年のカンボジア問題、また 79 年の中越戦争と続き、しばらく国際社会からの孤立を余儀なくされていたのである。そこからの脱却を図るため、ベトナム政府が採用したのが刷新政策・ドイモイである。

3. ドイモイとは何か―理念と概観―

南北統一を果たした後、ベトナムは社会主義国として再出発したが、計画経済のもとで景気はだんだんと停滞していった。1982 年にはついに底辺に達し、体制に対する批判が現れ始めた。それがドイモイ政策が検討される発端となったのである。もちろん急激な変化ではなく、党の全国大会が繰り返し行われ、その度に路線が修正され、新しい内容を決定してきた。ドイモイとは「刷新」を意味し、その内容を一言で言うと「市場経済の導入」である。ベトナムでは長い時間をかけて、政治体制はそのままに市場経済だけを取り入れた。それまでは資本主義についての議論などできるはずもなかったが、それが徐々に検討されるようになり、実施されるに至ったのである。

1996 年は、ドイモイ路線採択から 10 年経った区切りの年であった。過去を振り返るとともに、今後の方向性を示すことで次の発展段階に入ったことが示されたのである。ベトナムはすでに経済的・社会的な危機から脱したことが強調され、2020 年までには工業国となることを目指されている。

4. 現在のベトナム：ドイモイ政策施行後

ここでわたしが見た現在のベトナムの様子について触れたい。現在のベトナムを一言で描写することは難しいが、なぜ難しいのかというと差が激しいからである。最初に飛行機を降りたホーチミン市はベトナム随一の都市であり、その活気や人の流れは、発展の只中にある国独特のものであると思う。市場は賑わい、我々のような外国人観光客も珍しくないのか、たどたどしい日本語で客引きをしてくる。日本のような高層ビル群とまではいかないが、かなり高い建物や電気屋、チェーンの飲食店もある立派な都会であった。雰囲気は多少違うが中部の都市ダナンや首都のハノイも同様であった。ダナン市内にあるデパートで買い物をした時も、セキュリティは厳しかったが店内は日本のものと大差はなかった。ハノイは日本の下町に似た様相で、建物が密集し、夜でも人通りが絶えない。

しかし少し車を走らせると、かなり違った景色が広がっている。研修中、クアンナム省フエ市にあるかつての皇居を見学に訪れたが、途中で窓から

見たのは延々と続く田んぼである。ちょうど稲刈りの時期であり、農作業にいそむ人々と放し飼いにされた牛が転々と見える。立ちはだかるハイヴァン峠を越えなければフエにはたどり着けないのだが、そこにトンネルを通すのに尽力したのは日本のODAであるという話だ。立派なトンネルではあるが、前後の道は完璧に整備されているとは言えず、人々の生活する様子からもずいぶん違った印象を受ける。

このような差は、地方分権が進んだことにより改革の進み具合にバラつきが生じたことに起因する。経済の刷新政策が進む中で、中央集権的な色合いが薄くなり、地方の裁量に任せられる部分が多くなってきた。そして市場経済が投入されハイレベルな競争の下にある都市部とは違い、地方ではまだ社会主義時代の風潮が残っている。発展の段階としては、まず都市部の生活水準を引き上げるという所にまで達しているが、地方にそれを行き渡らせるという所までは至っていないというのが現状であろう。このような地域格差はベトナムだけではなく、中国など多くの国々で見られる現象である。

また日本との違いで言うと、特に接客業のレベルに大きな差異があると感じた。ある程度高額な、立派な店構えのチェーン店においては上質なサービスが受けられるし全く不足は感じない。しかし大衆向けの食堂などにおいてはずいぶん事情が異なる。どこの店でも味はうまいが、サービスを提供するという意識やノウハウがないのか、接客態度や効率が悪いケースが目立つのである。内装などに関しても無頓着というか、趣向を凝らすとか目立つ看板を出すとか丁寧な接客をするというような努力が特にされていない。わたし個人としてはそれで別に構わないと思うし、こういった要素も下町的な味であるとも言える。しかし市場経済化がさらに進めば、広告産業がさらに発展してくることだろ。そうして競争が激化すると、商店ごとにもっと工夫や宣伝が必要とされてくるのではないだろうか。

I. ダナン市の都市計画

1. ダナン市の現状

ダナン市は、ベトナム中部に位置する都市であり、1997 年



(2008 年 9 月現在のダナン市内。ホテル屋上より)

から中央政府の直轄地となっている。面積は 1,256 平方キロメートル⁶で東京都の約半分、人口約 73 万人⁷(2001 年現在)で東京都の 17 分の 1、全ベトナムの 100 分の 1 の人が住んでいる。東南アジアの中心に位置し、海路・陸路ともに便利で、中継地として栄えている。周囲にはかつて日本人町のあったホイアンや古都フエなど、世界遺産も抱えており、観光収入も十分に見込める立地だろう。経済状況については、GDP の伸び率 13.4%⁸と高い水準であり、ベトナム全体の 8.5%⁹という数字と比較しても優秀である。

ここで、実際にわたしの見たダナン市について少し述べておく。同市はハノイやホーチミンに比べると落ち着いていて、市内の観光地化は進んでいない。外国人であるわれわれが珍しいのか、好奇の視線を向けられることもしばしばであった。空港もあることから周辺観光地への経由地という印象が強い。現地の日系企業に勤める人に話を聞くと、娯楽が少なく休日などを持て余してしまうこともあるようだ

このようなダナン市の現状も踏まえて、ダナン経済開発局の立てている今後の開発計画について以下のようにまとめる。

2. ダナン市の開発計画—経済開発局の指針—

ダナン市の開発については、都市計画省ダナン経済開発局という部署が中心となって執り行われている。そこでは具体的に、今後ダナン市をどのような方向で発展させるかを綿密に計画している。

今後 2020 年までの目標としては、人口増加と工業部門のさらなる発展に加え、観光・IT を含めたサービス部門の拡充を目指している。IT 系企業を集中させたオフィスビルがすでに建設され、あとは企業を入れるだけという段階にまで入った。またショッピングセンターの建設も始まっており、観光客向けにゴルフ場、カジノの建設のほか、高級住宅地を作る計画もある。特に上記のような娯楽施設は、湾の一部を埋め立ててつくる商業地域に集中させる予定である。

物流の面でいうと、東南アジアの中心的位置であることを利用して、タイやラオス、ミャンマー、日本、シンガポールなどの中継地点として栄えようという展

⁶ DANANG DEPARTMENT OF PLANNING AND INVESTMENT <
<http://www.dpi.danang.gov.vn/english/General/149526/>> (参照日：
2008.12.30)

⁷ 同上 <<http://www.dpi.danang.gov.vn/english/General/1467/>>

⁸ ダナン経済開発局の示したデータによる

⁹ 2007 年現在。外務省 HP <

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/data.html>> (同上)

望がある。タイとベトナムをつなぐ高速道路(東西回廊)の建設が現在進んでおり、さらに湾内に港を建設することで海路もつなぐ計画である。

数値目標としては、人口は現在の 80 万人から 140 万人を目指し、工業部門での生産を上げていく。経済成長率としては、周辺地域と協力しつつ 12-13%を維持する。ひとりあたり GDP は 3800 \$ を目標に、急速な経済成長を進めていく構えである。

3. 市場経済導入によるデメリットをいかにフォローするか

現在も社会主義という政治体制を維持しているベトナムにおいて、市場経済導入によって生じる格差をできるだけ少なくするために、ある程度の政府の介入がある(社会主義性向市場経済)。つまりある程度の差が生じてしまうのは仕方がないとして、どの程度の格差なら許容できるのか、全体の生活レベルをあげるにはどうすればいいのかという議論になっている。

ダナン市では貧困層に向けた生活保護を充実させるほか、貧困層を現在の 30%から 10%にまで減らすために、教育機会を与える努力をしている。特に農民が労働者になろうとする際にはその費用などを支援しているが、若者は比較的スムーズに対応できるのに対し、中年以上ではなかなか対応しきれないという問題もある。企業側としても中年以上の労働者はあまり雇いたがらないため、政府は資本金を提供することで、このような再就職を支援しているのである。

4. ダナン市の開発を見た感想

印象から言ってしまうと、ダナン市の発展の度合い、それにかける情熱は猛烈な勢いである。先日、映像資料で戦時中のダナン市を見たことが、そこは木の一本も生えない焼け野原であった。そこから立派に街を建て直したのは市民の努力だろうが、ここはさらなる発展を目指している。行政は非常に綿密な計画を立て、5 年 10 年先を見据えた開発を行っている。

観光と IT を二本柱とし、観光面では富裕層をねらった高級リゾートを建設し、IT 分野では時代の最先端にいる企業を誘致する。20 年ほど前の貧困状態から脱し、いっきにグローバル化の波に乗っている。他国との国交回復、市場経済の投入といった国家の政策を、この街が体現しているのである。

ベトナムという国全体に、まだまだ変化していく余地があり、日本とは比べ物にならない勢いでそれが実行されていくだろう。それに伴い、ダナン市も今後、めまぐるしく変容を遂げていくだろう。

参考文献

- 白井昌也・竹内郁雄編『ベトナムのドイモイの新展開』（日本貿易振興会 アジア経済研究所、1999 年）
- 坪井善明『ヴェトナム新時代—豊かさへの模索—』（岩波新書、2008 年）
- トラン・ヴァン・トゥ『ベトナム経済の新展開—工業化時代の始動—』（日本経済新聞社、1996 年）